



魔法と包茎と
寝取られマゾヒスト¹

アタシなりの予想を言うわね？

でも、多分・・・これがタクヤの考えていたことに間違い無いわ。

『包茎の癖に女性と付き合う』

社会で許されない行為だと知っていないがらね。

そうすれば保有権がアタシに回ってくる。

保有権をいつか、アタシが行使すれば・・・。

タクヤは、もう一度アタシのそばにいられる。

それしか包茎男子が好きな女子と一緒にいる方法は無いんじゃないかしら？

分かっていたはずよ？

新しい男がいるって。

新しい男にも、アタシにも奴隷として扱われるって。

でも。

それでも・・・。

包茎のタクヤがアタシのそばにいるためには、それしか選択肢が無かったんじゃないかしら？

そのために、タクヤは高校の頃からずっとこうなるように仕組んだんじゃないかって。

そう考えれば、あたしを抱かなかった理由も分かるわ。

(まあ、そもそも真正包茎だから抱けないけど・・・)

もしも、あの時アタシに迫っていたら・・・。

アタシは保有権を行使しないでしようね。

それはアタシも自分の性格だから分かるわ。

きつとタクヤに対する怒りを忘れない。

分かってるわ。

自分のことだもの。

でもね？

アタシとシオドスの幸せな家庭に、割って入ってきて・・・

それって、なんか嫌なのよ。

嫌な理由？

そうね。

いないと思っていたはずのゴキブリを見つけた感覚に近いかな。

捨てた男なのよ？

タクヤは。

感情を持たないなら、そばにおいてあげる。

そのくらい当然でしょ？

包茎なんだから。

奴隷なんだから。

男でさえ、ないのよ？

世界が許しても、あたしが許さない。

だって、そうでしょ？

この世界を楽しむのは、アタシのはずよ？

タクヤの計画通りに事が進むはず無いじゃない。

そういうのはプチプチ潰してあげるのが、世のためよ。

許さない。

許せない。

だから・・・

追い出すことにしたの。

結婚式のその日に。

だから・・・

ただの一度も、アタシとシオドスは夜の営みにアイツを近づけさせなかった。

普通の奴隷は、マ○コの舐め掃除ぐらいするものよ。

アイツ自信、性的なご奉仕が得意って自分で言ってたしね。

でも、させない。

させてあげない。

結婚式のときに、子供がやるアレ。

新郎新婦が歩く道をに花びらを撒くやつ。

なんて言うのかしら？

ああ、そうそう！

フラワーガール。

アレをタクヤにやらせて、それでアイツの役割は終わり。

そのまま最果ての調教場に逆戻り。

アタシとシオドスが初夜を迎える頃に、タクヤは拷問官との再会を果たすの。

素敵でしょ？

包茎なくせに、女を愛した罰。

貞操帯を嵌められて、一生勃起も射精も出来ないの。

拷問されて生きていくの。

包茎のくせに、謀をした罰。

恋人を寝取られて、彼女の結婚式で花を巻いてバージンロードを清めるの。

そして、そのまま収容場に逆戻り。

それがあなたにはお似合いよ。

大好きだった彼女のマ○コ、見れなくて残念ね？

もう二度と保有権は行使しないわ。

さ、行くわよ。

シオドスとアタシが歩くバージンロードを清めなさい。

小賢しい包茎奴隷の坊や♥

第一章くくく包莖男子だとバレる時くくく

高校三年生になると、すべての男子がオチ○チン検査に駆り出されるでしょ？
いくら魔法がこれだけ発達しても、子供だけはどうしたって生物としての営み無しでは
できないもの。

だから男子は、オチ○チン検査をされる。

子供を残すためには、真つ当なオチ○チンが必要だから。

真つ当なオチ○チンかは公的な場所で、公衆の面前で検査するのよ。

ごまかせないようにね。

当たり前の理屈でしょ？

その代わりといっってはなんだけど・・・。

真つ当なオチ○チンの男子は、社会的にも優遇されるし、女子もそういう男子を全力で支えるわ。

逆に、包莖男子は最悪よ。

そもそも包莖男子は、結婚が許されていないわ。

ブラック企業以外の就職は認められないし。

包莖の度合いによつては、奴隷コースだし。

もちろん結婚ができないのだから、経済的に裕福になる必要が無いじゃない？

だから生涯収入は真つ当な男のその10分の1にも満たないわ。

生かさず、殺さず。

生活費ギリギリの額面って法律で決まってるの。

もちろん、包莖男子は大学に通うことも女子とお付き合いすることも許されない。

それって当たり前でしょ？

包莖男子が女子とお付き合い出来るわけ無いのは・・・分かるわよね？

大学も同じ。

真つ当な男じゃない包莖男子がいくら研究したって、たいしたもの出来ないわ。

それが社会でしょ？

許される範囲で、生きていくしかないの。

あら？

大切なことを言い忘れていたわ。

さつき話したオチ○チン検査ね？

包莖認定された男子は、その場で貞操帯を嵌められるの。
一生外せない貞操帯よ。
だって、包莖の癖に女子に欲情したら「メッ！」でしょ？
だったら勃起できなくするのが、合理的じゃない。

今日は、その日。

アタシの付き合ってる彼、タクヤ。

タクヤとはまだ、一回もSEXをしたことが無いの。

（だって、どれだけ誘っても、全然抱いてくれないの。・・・彼。）
だから、どんなオチ○チンか知らないけど。

楽しみだわ。

成績も優秀だし、顔もそれなりに良い。

男として真っ当なら、大当たりって感じ？

女子にも優しいし。

タクヤとは、ラブラブなの♥

彼と付き合って、アタシも生活にハリとツヤが出たわ。

クラスの誰もがアタシたちの関係を知っているし、応援してくれている。
祝福してくれている。

タクヤがいい奴で、努力家だからよ。

その日は、朝からすべての男子が震えていたわ。

顔面蒼白。

本当に顔って蒼くなるのよ。

でも、それって当たり前よね。

いつも通う教室で、

それも女子全員が見ている前で、

高校三年生にもなって、オチ○チンを出さなくちゃいけないんだもの。

しかもその場にいる女子全員が、結束して、

「この男子は包莖です」

って判を押したら・・・。

たとえ包茎でなくても、一生貞操帯付きの極貧生活よ？

怖がるのも分かるわ。

タクヤもそうだった。

朝から、ずっと黙ってて。

アタシが何を話しかけても、

「うん」

しか言わなかった。

「大丈夫よ。

タクヤ。

包茎じゃないんでしょ？

それなら、心配しないで。

誰もタクヤを嵌めたりしないから。ね？」

「うん」

ホントに怖いのは分かるけど。

怯えすぎじゃないかしら？

この時はそのくらいにしか思わなかったわ。

で、出席番号順に一人ずつ、男子が全裸で教壇に立っていくのをアタシたち女子は、ニヤニヤしながら眺めていたわ。

「あ、カメラヤ君のオチ○チン、大っきい！」
とか。

「うわー。リデイルのヤツ。包茎だよ。嫌なやつだったからなあ。ザマアミロ！」
とか。

一方、男子は悲喜こもごも。

まあ、それも見ていて楽しかったわ。

中にはガッツポーズをとる男子もいれば……。

リデイルなんて、「包茎じゃない！」って、その場で泣きながらオチ○チンまで突き出したけど。無駄無駄無駄。

「リディルっ！
あなたは二次検査行きです。
再度、検査してあげるから、さっさと引っ込みなさいっ！」

担任のミーちゃん先生がピシッと、ごねる甲斐性無しに言いつける。
格好良いでしょっ！
出来る女って感じ！

アタシはあんな風に、ミーちゃん先生みたいに出来ないからあこがれてるの。
だって、アタシ・・・いわゆるおっとり系だし。
気合とか良くわかんないし、働くだなんてとんでもない！
だから、いずれはタクヤに養ってもらうんだ。

・・・この時までそう思っていたわ。

タクヤの番になって、アタシは彼の検査結果の欄に・・・。
まだ見てもいないのに、『包茎ではない』の欄に丸を書き込んでいた。
見なくても分かる！

だってあんなに勉強が出来て、女子に優しいタクヤが甲斐性無しの包茎なはず無いもの！

でも、・・・タクヤが教壇に上がって・・・。

あたしは自分の体温が。

両手両足から。

それから顔の辺りの温もりとか体温と呼ばれるものが、一気に消えていくのが分かった。
本当に視界が真っ暗になったわ。

だって、彼。

真正の包茎だったの。

確か言ったわよね。

包茎も度合いによつては奴隷コースだって。

タクヤのそれは、完全に包茎だった。

それもミーちゃん先生が

「剥けるところまで、剥きなさいっ！」
って言ってるのに、全然剥けないの。

先っちょがほんの少しだけ、見えるだけ。

間違いなく、奴隷コースのそれ。

どんなに検査しても、覆ることの無い……。

完璧な包茎野郎。

「……最低。」

誰かがそう言ったわ。

あるいは、アタシが言ったのかもしれない。

それはそうよね。

誰だって。

誰だって、知ってることよ。

包茎男子は女子とお付き合いできないって。

甲斐性無しは、女子とお付き合いしてはいけないって。

それなのに。

それなのに……。

タクヤ。

アタシのこと……騙してたの？

タクヤと……

いつかはタクヤと結婚しようと思っただけ、思っていたのに。

「しっかり！」

気を確かに持ってっ！」

ミーちゃん先生の声とともに、世界が回天してる。

どっちが上で、どっちが下か分からない。

眩暈。

これが眩暈というものなのだと、初めて知ったわ。そして、もう二度と体験したくない。

ミーちゃん先生に支えられながら、アタシは教室を出た。保健室で横になるため。

保健の先生はすぐに回復魔法をかけてくれたわ。

おかげで、眩暈はほとんど消えた。

気持ち悪さが消えたら、嫌な感情。

はつきり言えば、ムカツクっていう感情が残った。

きつとアタシ、それが顔に出ていたのね。

保健の先生に

「聞いたわよ。

タクヤ君。

あつ。

もう君はつげなくて良いのね。

タクヤ。

包茎だったんだって？

まだ、二次検査・・・やってるだろうから。

動けるなら行ってきなさい。

真正包茎の欄に丸をつけるだけで、幾分か気分もすっきりするわよ。

無いとは思うけど、包茎に見えただけかもしれないしね。

光の関係とか、錯覚とか」

「・・・はい。分かりました」

ありえないような可能性に希望を託すようなことを言う保健の先生にお礼を告げて、アタシはベッドから立ち上がった。

やっぱりプロの回復魔法は一味違う。

気持ち悪さとか、眩暈はもう無い。

でも、心の治療までは出来ないのね。

そこに空いた穴は・・・自分で埋めなきゃダメだ。

二次検査は、女子の誰か一人が直接オチ○チンに触って、確かめるの。万が一、包茎じゃなかったらその男子が可哀想でしょ？

でも、もしも包莖だったら、触って確認した女子が貞操帯を嵌めなければならないの。
一生外せない鋼鉄の檻を。

教室に戻ったら、タクヤ以外の二次検査はすでに終わっていたわ。
残りはアイツだけだった。

教壇に立たされたアイツは、アタシを見るなり歯をガチガチ鳴らして怯えていたわ。
どうせその怯えだって、あたしを裏切った後悔の念じゃないんでしょ？
これからの自分の境遇を案じてでしょ？

そう思ったの。
すぐくムカつく。

話しかけるクラスメイトをシカトして、アイツの前に立ったわ。
私・・・すごく怖い顔になっていたかも知れないわね。

アイツが怯えて、アタシの目をまっすぐ見れなくなったのを確認してから、アイツの股間
を確認したの。

間違いない。
包莖。

真正の包莖。
議論の余地無し。

「ヘレーネちゃん。気持はわかるけど・・・」

ミーちゃん先生がアタシに貞操帯を手渡した。
そうね。

これはアタシの役割だわ。

「やめっ・・・やめて・・・お願い・・・お願いします・・・」

タクヤの言葉が無視して、アタシはそれを嵌めた。
念入りに、念入りに鍵が外れないように。

強く、強く魔力をこめたわ。

鍵はミーちゃん先生がその場で溶かして、捨てた。
もう、タクヤは勃起できない。

射精も出来ない。

「一応確認するわね？

タクヤ。

あなた・・・童貞よね？」

「うう・・・はい・・・そうです・・・」

クラスメイトの前で、宣言させた。

そうした理由は、簡単。

アタシが汚されていないって、皆に知ってもらうため。

アタシもアイツのオチ○チンが包茎だなんて知らなかったって、皆に分かってもらうため。

・・・そうか。

だからタクヤは、アタシがあんなに誘ったのにアタシを抱かなかったのね。

この為だったんだ。

抱かれなくて良かった。

それだけが救い。

第二章くくく包茎男子にかける魔法くくく

オチ○チン検査が終わって、アタシは机に突っ伏して空を見ていた。妙に落ち着いていた、と思う。逆かもしれない。

心を取り乱しすぎて、きちんと反応できなかったのかも。こんなにも絶望したことは無かったから。

クラスメイトには、アタシがぼーっとしていたように見えていたかもね。

「へレーネちゃん。

ミーちゃん先生が、呼んでるよ？」

「え？

あ・・ああ。

分かった。アリガトね」

「うん。

元気出してね？

いい男なんて、いくらでもいるんだからさっ」

アタシは作り笑いをしながら、友達に再度、お礼を言って職員室に向かった。途中、廊下の端に包茎男子が全裸で並べられている。

全員金縛りの魔法で動けないようにして、股間を隠せないようにして。中には、意地悪なヤツが、（この場合、男子も女子も両方ともよ。）包茎男子が抵抗できないのを良いことに殴ったり、パンチラして苦しませたりしてた。

アタシは出来るだけそういうものを見ないようにしながら、職員室のドアをノックした。

「いらっしやい。

そこに座って。

まずは何から話そうかしら？

やっぱりタクヤのことから、よね。

タクヤは、ね。

一番厳しい『最果ての調教場』送りが決まったわ。

これから相当厳しい人生を送ることになるけど……。
自分が包茎だと知っていながら、あなたと付き合っていたんだもの。
とても残念だけど、……当然の罰よ。
それでね？
ここからが本題なんだけど。
法律に照らし合わせると……あなたには彼を奴隷として保有する権利があるの。
もちろん、お金はかからないわ。
どうする？」

「えっと……」

正直に言って、タクヤを保有したいと思わなかった。
でも奴隷って、いれば便利だって聞くし……。
それに奴隷は買うと高くつく。
ママとパパもそれぞれ一匹ずつ、保有してるけど。
それはいわゆる上流階級だから。
アタシが同じように恵まれた環境で生きていけるかは……
高校生のアタシにはまだ分からない。
タダなら……
保有しておくのも……悪い手じゃないのかな……。
それが、タクヤだつてことが問題なだけで。

「すぐに決めなくて良いわ。
どうせあなたが許してくれるまでタクヤは、最果ての調教場生活だから。
ただし、許すということは、あなたが彼を保有するということでもあるわ。
じっくり時間をかけて考えてね」

「……はい。分かりました」

タクヤはその日から一切見なくなった。
放課後、一斉に包茎男子が収容所に運ばれていったから……。
多分その中にいたんだろうと思う。

アタシの高校生活で、目立ったことなんて、このくらい。
後は何も無かったわ。

そこそこの大学に進学して……。

普通に恋をして……。

初めて、彼に抱かれた時は、ものすごく痛かったけど……。
でも、いいの。

今は幸せだから。

今の幸せを運んでくれた彼。

今の今まで、あたしを抱いていたアタシの彼。

シオドス・リュカ・レイリー。

アタシと同じ金髪。

歳はアタシよりも3つ下だけど、間違いなく真つ当な男。

まず第一に、包茎じゃない。

ギャンブルもしないし、仕事もアタシのパパほどじゃないけど、裕福な部類に入る。

何より、安定企業の代名詞である魔法協会勤務。

それが嬉しい。

横で眠っていて、安心できる。

不安にならない。

そんな男。

「なあ。ヘレーネ。

結婚したら、犬飼おうぜ。

大型のヤツ。

それから、包茎奴隷も欲しいな。

今は高くなってるけど」

「うん？

奴隷？

今の政府は、ご主人様のいない包茎奴隷を競りに出す数、絞ってるみたいよ。

本音は、税金欲しいだけなんだろうけど。

また値上がりしてみたんだよ？

どうしても言うなら、……シオドスが出世したらね？」

「くくく」

「あはっ♥・・・やっぱり今の、プロポーズのつもりだった？」

「そうだな。」

犬は安いから。

そっちから手を付けるか」

「うん♥」

ぎゅーって彼の胸に抱きつく。

こうしてアタシは、結婚することになった。

これがアタシの受けたプロポーズの瞬間。

「そういえば、同棲してもうすぐ一年だね♥」

「ああ」

一瞬だけ。

このときなぜか高校卒業以降、完全に忘れていたはずのタクヤを思い出した。結婚って言葉に脳の蓄積言語が反応したのかも。

蓄積言語とテレパシーに相互関係はあるか？

ずいぶん長い間、人類の難問だったけど。

アタシの中ではすでにカタがついたわ。

答えは、ある。

大いに、関係ありっ！

だって、アタシとシオドスの愛の単に、タクヤからの手紙が届いたのが翌日の朝だったんだもの。

間違いなく、あの瞬間。

タクヤも感じたのよ。

アタシとシオドスの愛を。

『拝啓。

ヘレーネ・イヴァ・ルスコフスキー様。

最果ての調教場・主任拷問官 ジョシユ・リンドと申します。

貴女が保有権を持つ、包茎奴隷タクヤでございますが、保有を希望される場合は以下の連絡番号まで思念をお送りください。

不要の場合は、御連絡をいただく必要はございません。

また、包茎奴隷タクヤより貴女にメッセージがございます。

ご覧になる場合は、次のページを。

不要であれば、そのまま破り捨ててください。

連絡先思念番号…088-772-4545。

最果ての調教場 管理事務所 奴隷保有係りまで』

当然、見るしかないっ！

そう思ったわ。

もうだいぶ怒りも収まっていたし、なにより奴隷をシオドスが欲しがっていたしね。

『お読みいただけることを感謝いたします。

包茎奴隷となったタクヤでございます。

現在の僕は、調教と拷問魔法漬けの日々を送っております。

毎日、ヘレーネ様へのお詫びの気持で一杯です。

どうか、お願いします。

一度だけ、会ってくださいませんか？

お詫びをさせて下さい。

※以下、管理事務所よりの注意書き

大半の奴隷は、ここから出ることを夢見て生きております。

どんなに可哀想だと思っても、哀れんではなりません。

また、奴隷のメッセージは文字数制限があるため、いくら言葉足らずのケースがございます。どうぞご了承ください。』

不思議と可哀想だとは思わなかった。

というよりも、笑えた。

何？

アイツ、まだアタシのことを想っていたんだ。

もうすぐアタシ、結婚するのに。

馬鹿みたい。

でも・・・その馬鹿さ加減が妙に可愛くも思えた。

「一回だけ、呼んでみるよ。」

「使えそうだったら、置いてやっても俺は構わないぜ？」

「本当？」

確かに、一回だけ呼び寄せて、どんな感じか見てみるのもアリかな？

アイツの顔見て、ちよつとでもムカついたら、すぐに引き取ってもらえば良いし。

そんな感じの結構軽いノリで、アタシとシオドスはアイツを呼びつけることにしたの。

「あ、もしもし？」

「はい。こちら最果ての調教場 管理事務所でございます」

「あの・・・手紙が届いて・・・。保有権を持っている奴隷がそちらにいるはずなんですけど・・・」

「では、お名前を」

「ヘレーネです。」

「ヘレーネ・イヴァ・ルスコフスキー」

「少々お待ちください。」

ああ。タクヤの保有者様ですね。

保有権を行使なさいますか？」

「一度家に呼んで、いろいろ試験したいのだけでも、そういうことは出来ますか？」

「ええ。可能です。」

不要になれば、いつでもご連絡ください。

再収容の手続きをいたします。

それから、タクヤの状態も選べますよ。

いかがなさいますか？」

「状態？」

「ええ。当収容所では、奴隷の罪に応じて、肉体改造も許されておりますので。タクヤの場合・・・」

女性を騙しての、交際行為ですから・・・

幼児化、両手両足切断。女体化、変わったところでは、キメラ化（※ここでは、獣との肉体的融合を指す）が可能です。

ちなみにタクヤをどういった用途でお使いになりますか？」

「えーっと・・・」

正直に言って、かなり迷った。

シオドスは犬が欲しいって言ってたから、キメラでも良いよね。

でも、アタシは家事するの嫌だから、女体化させてメイドにでも・・・。
うーん。悩むなあ。

「用途は・・・そうね。」

実は、初めての奴隷なの。

だからアドバイスが欲しいのだけでも。

旦那が仕事中は、家にいないから。

その辺を考慮して・・・。

家事全般用と、犬を飼うから犬の邪魔にならないようにしたいの」

「左様でございますか。」

では、幼児化がお勧めです」

「幼児化？」

はつきり言って、さっきの肉体改造案の中では一番無いかも。って思ったやつを勧められて、アタシはちよつと困った。

「幼児化すると肉体的には、4〜5歳の児童の肉体になります。

徹底的に調教してありますので、必死で働きますわ。

それに万一気に入らない場合は、所詮は4〜5歳児の肉体ですから、奥様のお力でもどうとでも出来ますし。」

お仕置きも非常に楽に行えますわ。

旦那様もご不在の間、ご不安に感じることは無いでしょう。
犬と同じように扱っても問題ございません」

なるほどね。

それはアリかも。

「分かりました。
じゃあ、それで」

アタシの言葉を聞くと、管理事務所の係り員は短くお礼を言って、思念を切ったわ。
そして次の日には、家のチャイムを鳴らす音がした。

「おっ！

もう来たのか。

早いな。

白猫宅急便は・・・」

「違うわよ。

白猫宅急便が早いんじゃないわ。

最果ての調教場は時間コントロールの魔法の使用が限定許可されているのよ。
あそこでは、奴隷が1日で3年間分の時間を過ごすって聞いたことがあるもの」

「へ〜。そうなのか。

ってことは、元々いた時間の1000倍の時間、調教された奴隷が来るのか。
楽しみだな」

シオドスと一緒に玄関に出ると、そこには鎖で繋がれた男の子がいたわ。

肉体年齢は・・・そうね。

思念の通り、4〜5歳に見えた。

でもそれはアタシの知ってるタクヤに間違いなかったわ。

すぐに分かった。

第三章くくく包茎奴隸にお尻叩きをくくく

玄関先、配送業者の人に引かれて。

裸で、貞操帯と首輪。

それに、首輪からリードを下げたタクヤがいた。

胸には奴隸ナンバーのバーコードが彫られていたわ。

「ルスコフスキー様宛のお荷物です。

ここにサインを。

はい。どくも。

また、よろしく」

・・・お荷物なんだ♪

そりゃそうだよね。

奴隸だもの。

包茎奴隸だもの。

人権なんて、無いもの。

当たり前か。

「小さいな。

名前は？」

シオドスの間にタクヤは股間をモジモジさせながら、答えたわ。

「包茎奴隸のタクヤと申します」

「ん？」

何を恥ずかしがってるんだ？

コイツ」

「アタシは分かるわよ」

「？」

「タクヤはかつての恋人と、その恋人の愛する男に、今日からご奉仕して生きていくのが
恥ずかしいのよ。
ね？
そうでしょ？」

タクヤは、小さな声で無礼を詫びた。

アタシはなぜかその仕草が子供っぽくて可愛く思えたけど、シオドスは気に入らなかった
みたい。

その場でタクヤに後ろを向かせて、中腰にさせたわ。

それから、玄関にあった金属製の靴べらでお尻を10回。

ウチの靴べらは、立ったままでも使えるように柄が長いタイプだし、軽くするために柄が
細いの。

つまり、良くしなるし、金属製だからめちやくちや硬いのよ。

中途半端な皮の鞭より、ずっと痛いはずよ。

それを、シオドスはまるで乗馬鞭を振るうように強く、強く叩きつけたの。

破壊系の魔力も込めたみたいね。

内出血して、タクヤのお尻はすぐに真っ赤になったわ。

「ひぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

「ひぎいいいいいいいい！！！！！！！！！！」

タクヤ、悶絶していたわ。

多分、痛みを強く感じる呪いでもかけられていたのね。

痛くて声をあげているというよりも、許しを求めるための声のあげ方だったもの。

「覚えておけ。

ここでは、俺とヘレーネがルールだ。

少しでも気に入らなければ、すぐにでも収容所に送り返すからな」

「はあ・・・はあ・・・

分かりました。

申し訳ありませんでした」

それからアタシたちは、タクヤをリビングのソファの前に立たせて、奴隷の宣誓をさせることにしたの。

奴隷の宣誓って言うのは、ね？

いくつか意味があるのよ？

まず第一に宣誓させる理由は、自分の立場を分からせるため。

特にタクヤの場合、アタシが元恋人だから余計にそれは必要よね。

それから、奴隷の状態をこちら側で把握するため。

精神や肉体に異常が無いかよくよく確認するためよ。

それって意外と大事なの。

奴隷は買うと高いんだから！

「さて、宣誓の前にいろいろと聞かせてもらおうか？」

「うふふ。そうね」

あたしたちの最初の質問は、もう決めてあるの。
多分・・・タクヤも分かっているはずだわ。

「元恋人の家に、奴隷としてきた気分はどう？」

「あ・・・あの・・・す・・・すみません・・・

こ・・・言葉が出ないです・・・」

「劣位の三角関係ってやつね♥」

アタシの言葉にタクヤは方をビクッと震わせる。

それが可愛い。

愛おしい。

そうよ。

それで良いの。

包茎の癖にアタシとお付き合いするなんて、ありえない。

一生、童貞の癖に。

一生、女を知らないで死ぬくせに。

罰を与えるって、最高ね♥

「どう・・・言葉が出ないんだ？

言ってみろよ」

アタシの横のシオドスが、ニヤニヤしながら靴べらをちらつかせる。

アレが相当痛かったのね。

目が完全に怯えてるわよ？

タクヤ♥

「あ・・・う・・・か・・・感謝の気持ちで・・・あの・・・こんな・・・悪いことをした僕に・・・こんなチャンスを・・・もらえるとは思わなくて・・・」

「感謝？

感謝ですって？」

わざと、大げさに驚いて見せたわ。

普通の精神状態の人間なら誰が見てもわざとらしい、演技臭い演技だっただろうけど。タクヤにはそれで十分だった。

——感謝している場合じゃない。——

——僕はここで、これからようやくあの時の罪償いが始まるんだ——

そう思わせるのに十分だった。

ほらほら♥

ちよつとでも言葉を間違えると、お尻ペンペンだぞ♥

嫌だよね？

怖いよね？

人生で唯一、オチ○チンに触ってくれた大切な、大切な元恋人に見られながら。

愛しい元恋人の旦那様になる男からの、お尻ペンペン♥

楽しいわ。

ものすごく楽しいっ！

もっと早く呼びつければ良かったわ。

もっと早く、いじめれば良かったっ！

こんなに楽しいなんて知らなかったの。

「さて、感謝している包茎奴隷は何が出来るんだ？」

「あ・・・あの・・・家事全般は徹底的に収容場で叩きこまれました。

それから、犬として生活すること・・・

あと・・・性の後処理も・・・」

「家事全般は分かるわ。

出来て当たり前。

タクヤは、奴隷だもの。

エプロン奴隷なんて、奴隷の最低限の仕事じゃない。

でも、犬としての生活って何？」

「あ・・・あの・・・

収容場に連絡を下さった際に、確か犬が欲しいって・・・」

「は？」

「ん？」

そんなこと言ったかしら？

あっ！

「もしかして、犬を飼うから、犬の邪魔にならないようにって言ったかもね（笑）」

「ははははっ！！！！」

じゃあ何か？

犬としての躰けを受けたけど、実際は必要なかったって。

そういう話か？

ははははははははっ!!!
馬鹿じゃねえの？」

二人で大笑い。

その間ずっと、タクヤはヘラヘラ笑っていたわ。
馬鹿よね。

人間が犬に成り下がるように調教を受けるのよ？
生半可な調教じゃないわ。

それをたった一瞬の勘違いでされていたなんて。

「じゃあ、その場で犬みたいにしてみろよ。

三回まわって、ワンと言え。

四つんばいだぞ？」

「は・・・はいっ！」

タクヤはアタシとシオドスの前で、犬みたいに四つんばいになった後、チンチンのポーズをとって、また四つんばいになったわ。

それから・・・

くるんっ。

くるんっ。

くるんっ。

「ワンッ！」

もう爆笑っ！

なんでワンって吠えた後、嬉しそうな顔をしているの？ (笑)

しかも、アタシと目が逢うと、悲しそうな表情に戻るし。

悲しそうな表情に戻ったことをバレたく無いのかしらね？

慌てて、犬の服従のポーズを取ったわ。

床に直接横になって、おなかを上。

両手両足はチンチンのポーズのアレね。

オチ○チンに、昔アタシが嵌めた貞操帯が嵌められて、それが銀色のアクセサリーみたいに光って可愛かった。

「ははははっ！

芸は覚えているみたいだな」

「あはははは。

久々に笑ったわ。

それで？」

「え？」

『『え？』じゃないだろ？

聞き返すな。

ほら。尻をこっちに向ける。

お仕置きだ。

二度と聞き返さないようにな」

「奴隷に聞き返されるなんて、私・・・嫌だわ」

タクヤも、自分が悪いって分かっているみたい。

顔をさびしそうな顔にして、すぐにお尻を叩きやすいように向けたわ。

それから床に手をついた。

我慢できるように。

倒れないように。

「旦那様。

奥様。

包茎奴隷風情が聞き返したりして、申し訳ありませんでした。

以後十分に気をつけますので、お仕置きをお願いします。

申し訳ありませんでした」

あらあら♥

お仕置きのオネダリも出来るのね。

良かったわ。

そんなところから躡けをするなんて、嫌だもの。
面倒じゃない。

「へレーネ。
今度はお前がやれよ」

「うん♥」

アタシはシオドスから靴べらを受け取って、それを思いっきりタクヤのお尻に叩きつける。

ヒュンツ!!

「ひぎやあつ!!!!」

ヒュンツ!!

「いぎいいいっ!!」

何回叩いたのかしら？

多分・・・10回か、20回ぐらい。

何回目からかは覚えていないけど、タクヤはずっと謝罪の言葉を口にしていた。
でも無視、無視。

タクヤの言葉を聞いてあげる必要なんか無いじゃない？

それなら聞こえないフリをしてあげるのが優しさでしょ？

それとも・・・アタシにもっと、お尻を叩かれないのかしら？

「覚えておいてね。

奴隷が謝罪を口にしても、反省してるかどうかは、主人が決めるのよ。

聞きたくない謝罪は、邪魔なだけ。

お仕置き続行よっ!

ねえ、シオドス。

私・・・甘すぎるかな？」

アタシはシオドスにそう確認した。

そうしたらシオドスは軽く微笑んでから、アタシから靴べらを受け取って、どういう風に

叩けば良いか、どう叩けばより痛がるかを見せてくれたの。

ピシヤアアアンっ！！！！

「ひぎいいいいいいいいいいいっ！！！！！！」

明らかにアタシの時とは叩く音も、タクヤの痛がり方も違う。

タクヤは背中を反れるだけ反って、少しでもお尻を引っ込めようとしていたわ。

素敵♥

アタシもこのぐらい強く叩かなくちゃ。

だって、タクヤは包茎だもの。

そうされて当然の男。

タクヤは包茎の癖にアタシとお付き合いしてたのよ？

だから、こうされて当然。

むしろ甘いくらいじゃない？

一番、身に染みて思い知って欲しいのは、痛みじゃないわ。

アタシは、もう他の男の女で。

あなたは、奴隷になったってこと。

それから一番強いのはあたしでも、タクヤでもない。

アタシの彼。

もうすぐ結婚するアタシの彼。

シオドスよ。

ピシヤアアアンっ！！！！

「ぶぎいいいいいいいいいいいっ！！！！！！」

シオドスが何回か叩くと、タクヤったら勝手に倒れちゃったの。

でも、仕方が無いわね。

休憩なしで、100回以上叩いたもの。

痛いなんてもんじゃないわよね。

もう身体が自由が利かないっていう状態になったのは明白だったわ。

もちろん、回復魔法なんてかけてあげない。

そのまま床に転がせておいて、アタシとシオドスはその場で祝福のキスをしたわ。

何の祝福かは分かるでしょ？

「奴隷を得た祝福。

屈服させた祝福。

それから・・・

かつての恋人を奴隷にした、勝ち組人生への祝福。

シオドスはアタシの唇を吸い付くように舐めて。

アタシはシオドスの舌を吸い上げる。

そして・・・タクヤは。

タクヤは、アタシとシオドスの足元で呟いていたわ。

「お・・・お願いです・・・。

ここに・・・置いてください・・・。

もう、・・・もう、あそこには・・・。

・・・戻りたくありません」

ってね♥

第四章くくく包茎奴隷の仕事くくく

昨日は、そのままシオドスと外で食事を摂ったわ。
タクヤはそのまま。

床に転がしたままにしてね。

だって、こんな幸せな日に外で食事を摂らないなんて、ありえないじゃない。

アタシたちが帰ってきた時には、タクヤも動けるようになったみたいで部屋の端っこで正座していたわ。

声もかけないで、寝ちゃった。

いいえ。

寝室で、シオドスに抱いてもらったわ♥

本当なら奴隷なんだし、タクヤにお掃除クンニとか、お掃除フェラをさせるべきなんだろうけど。

アタシ、タクヤをまだそこまで信用してないの。

だって、何年も会ってなかった男にいきなり大切なところを舐めさせられる？
大切な旦那様のオチ○ポを舐めさせられる？

いきなり嘔み付いてきたら嫌なもの。

その程度の信用さえも得られないタクヤが悪いのよ。

舐めたければ、それなりの態度を示しなさい。

だって……あなた……。

………奴隷なのよ？

で、今日ね。

朝から旦那様はお出かけ。

普段のアタシなら、そのままお掃除を始めるところだけでも。

今日から、タクヤがいるからその必要も無いの。

えへへへ♥

まずは、床掃除を命じたわ。

本当はモップがあるんだけど。

タクヤは包茎奴隷だから、モップなんてもったいないわ。
雑巾で床を磨かせたの。

もちろん裸だよ。
服を着るなんて、とんでもないわ。

タクヤが床を磨いている間、アタシはずくずくと彼のお尻を靴べらで叩いていたの。
昨日みたいに強く叩いたりしないわ。
軽くつくぺちぺちだけよ。

どこを叩くと痛がるか、どう叩くと良い音が鳴るか研究しないと。
アタシだって、いつまでもシオドスに負けていけないじゃない？

タクヤはずくずくと

「ひあっ！」

とか

「ひっ！」

とか言っていたけど、無視無視無視っ！
おかげでだいぶ分かったわ。

タクヤは、アナルのちよつと下を叩くと一番痛がるの。

それから、良い音をたてるコツは叩く前に出来るだけ大きく振るかぶること。
それと、破壊系の魔力を手の平じゃなくて、腕全体に纏うと良い音が鳴るわ。

可哀想なタクヤ ♡

だってそうでしょ？

仮にも男よ？

それが、かつての恋人に家事を命令されて。

言われたとおりにしなくちゃいけないなんて。

しかもその間中、ずつとお尻をぺちぺち金属の靴べらで叩かれてるの。

どうやったら痛がるか、どうやったら良い音が鳴るか確かめるためだけにね。

そして、弱いところを見つけられて、良い音が鳴るやり方も発掘されて。

でも、安心して。

少しだけ、あなたを見直したわ。

昨日から、今の今までお尻が一度も逃げなかったもの。

我慢するってことは覚えたのね？
偉い偉い。

子供みたいな（まあ、実際に子供の身体なんだけど）髪質だからツヤツヤで撫でやすかったわ。
そもそも頭が下にあるしね。

次は、朝食の片付け。

何が嫌って、食事の後の食器洗いが嫌なのよ。

面倒なもの。

でも、いいの。

今日からタクヤが洗うのだから。

全部嫌なことはタクヤがするの。

タクヤだって、嬉しいでしょ？

拷問と調教漬けの毎日よりも、家事手伝いの方が。

たとえそれが、大好きだった彼女の命令でも。

大好きだった彼女は、誰かの女になっていて・・・

彼女と旦那様に命令されて、生きていく人生でも。

幸せだと感じるでしょ？

「タクヤ？

今の音は何？」

分かってるわよ。

本当は分かってる。

タクヤがお皿を割った音だってことくらい。

アレは、台所で彼がお皿を割った音。

そして、お仕置きの時間を告げる鐘の音♥

さて、と。

何回お尻を叩かれたら、お皿を割らない良い子になるのかしら？

アタシは、わざと何も持たずにキッチンに向かったわ。

今日は、あの靴べらは使わない。

もっと屈辱的なやり方を、選んだの。

「あら。」

イイコね？

大切なお皿を割るなんて・・・」

アタシの声にタクヤは背を震わせる。

ここで。

お仕置きの現場で、アタシが忘れてはいけないことはたった2つ。

☆1 タクヤの一番嫌なことを、ちらつかせる。

つまり、『収容場に逆戻り』って切り札をちらつかせること。

精神を追い込むの。

煮詰めるの。

もう、これ以上耐え切れないところまで。

☆2 タクヤの身体に教えてあげること。

だって・・・彼・・・。

4〜5歳の子供と同じ身体なのよ？

そんなおいしいことを逃す手は無いわ。

たっぷり楽しまなくちゃ。

同い年の男を、子供のように叱り。

圧倒的な体格差で、お仕置きしちゃうの♥

「・・・で？」

アタシはわざと、確認する。

タクヤが、何をしたのか。

タクヤが、どう思っているのか。

もちろん聞かなくても分かっている。

でも・・・。

必要でしょ？

気持を確認する作業って。

男の人ってそういうのは、無いのかしら？

アタシは必要だと思っわ。
だから、確認する。

「どうしたの？
どう思ってるの？
ねえ、教えて。
タクヤあ」

「あ……あの……
……その……お詫びしたいことが……」

アタシの声、3度目。
さすがにもうこれ以上、黙っているわけには行かないわよね？
これ以上返事をしないわけじゃないわよね？
そうよ。

震えながら、オネダリしなさい。
お仕置きを。
懲罰を。

その瞬間。
タクヤはアタシの予想と違う行動をとった。

「いぎっ！
痛いっ！
痛いいいいっ！！！！」

すぐには、何が起こったか分からなかったわ。
でも、タクヤの股間を押さえる仕草を見て分かったの。
コイツ、勃起したんだって。

そうね。

旦那のいない昼下がり。
大好きだった彼女は、いまや人妻。
そして、ご主人様。
そんなアタシに、お仕置きしてもらえるんだもの。

包莖にとつては、これ以上無いご褒美よね。

でもね？

だからって、やっていいことではないでしょ？
勃起だなんて。

包莖に許されることだと思おう？

いいえ。

絶対にNG。

許すはず無いでしょ？

許されるはず無いでしょ？

だから、お仕置きは追加しなくちゃ。

まずは・・・そうね。

アタシが忘れてはいけないこと。

『☆1』よ。

ちらつかせなくちゃ。

「最果ての調教場。

戻りたい？」

アタシは出来るだけ、母親が子供を諭すような甘い声で、タクヤに囁く。

「あああああ！！！！！！

嫌ですっ！

嫌なんですうううっ！！！！

お願いです！

もう二度としませんからっ！

あなたのそばにいさせてください！

もう二度と・・・しませんから・・・」

何を？

アタシはそう聞こうとして、止めた。

答えが『もう二度と、お皿を割らない』

それなら構わない。

って言うか、当たり前。

でも、もしも・・・。

もしも、包茎の癖に、

『もう二度とアタシと付き合ったりしない』

とか、

『もう二度とあなたで、勃起しません』

とか。

そういう類だと困るわ。

だって、タクヤがまだアタシを恋をする相手として見てるって、自覚があるって事じゃない。

違うのよ？

貴方はそんな相手じゃないの。

ここは・・・。

多分ここは、アタシの大きさが試されている。

人間としての大きさが。

笑って、お仕置きするか。

タクヤが怖くなって逃げるか。

少しでも、タクヤの恋にアタシは気がついてはいけない。

気がついたことを悟られてはいけない。

そんな空気を出してはいけない。

もしも、そうだったら・・・

アタシの安定はどうなるの？

・・・杞憂ね。

たとえ、何があってもタクヤは捨てた男。

包茎奴隷なのよ？

何、怯えてるのかしら。

アタシ。

「うふふ。

そう？

それなら、お仕置きが必要ね？

タクヤ」

アタシは怯えるタクヤの耳をツネってそのまま離さずに、リビングまで引いていく。
タクヤは声をあげないように唇を噛んでいたけど、相当に痛いはずよ。

アタシ、手加減して無いもの。

・・・それにしても。

タクヤの耳って、ちょうどアタシの腰の高さなのね。
ツネって引くにはちょうど良い高さだわ。

より痛いと感じるように上に引っ張っては戻し、引っ張っては戻す。
なんか、楽しいかも♪

だって、すごく痛そうな顔をしてるのよ。

タクヤったら。

リビングに連れてきたのは、ここがキッチンよりも広いから。

アタシがタクヤを抱えても、大丈夫。

倒れてもよろけても、壊れそうな家具が無いから。

そうよ。

抱えあげるの。

一度やってみたかったんだ。

同じ年の男を脇に抱えて、お尻ペンペン。

「こらっ！」

暴れないのっ！」

嘘、嘘。

タクヤは暴れてなんかいない。

なんとなく、雰囲気を出すために言っただけ。

それでね。

タクヤの真っ白で、ハリのあるお尻を・・・。

アタシの手の平で・・・。

パーンっ！

「いっ！」

さすがにシオドス並みに強くなってワケにはいかないけど。
でも、それがもどかしくて良いんじゃないかしら？

なんかママに、お尻をペンペンされてるみたいでしょ？

アタシ・・・あなたのママじゃないわよ？

元恋人で。

ご主人様で。

奥様で。

それに、いつでも調教場にタクヤを送り返せる権利者なの



ペーンっ！

「あひっ！

お皿を割って済みませんでしたっ！」

「うん♪

でも、まだ許さない♥」

パーンっ！

嫌だわ。

すごいことに気が付いちやった。

「タクヤ？」

「は・・・はいっ！」

「気が付いた？」

「え？」

な、何をでしょうか？」

「貴方のお尻。

アタシの手をと同じくくらいの大きさしかないのね」

あはははっ！

馬鹿ね。

そんなことを今更、恥ずかしくてどうするのよ。

もしかして、子ども扱いして、可愛がって欲しかった？

するわけ無いでしょ？

あなたは包茎なのよ？
分をわきままえなさい。

結局・・・。

シオドスが帰ってくるまで、たっぷりお尻叩きを続けたわ。
それから、お皿の後片付け。

夕食の準備。

シオドスからお仕置きとして、吊るし上げての人間サンドバック。

大人の力で殴ったから、タクヤったら全身痣だらけになっていたわね。

(逆さ吊りって本当に顔がドス黒くなるのね。知らなかったわ)

もちろん朝まで、続けたわ。

タクヤが割ったのは、一枚100円のお皿なんだけどね。(笑)

アタシとシオドスが式を挙げるときまで、タクヤはウチにいられないと最初は、そう思っていたわ。
でも、その予想は間違いだった。

あの小さな身体で、彼は必死で働いたわ。
アタシたち夫婦より遅く寝て。
アタシたち夫婦より早く起きて。
働いて、働いて、働いて。
仕事を与えなければ、自分で見つけて来たわ。
そうやって、働いて、働いて、働いて。

シオドスもアタシも、タクヤが命令以外のことをするのを目を細くして見ていたけど。
それも最初だけ。
何で放っておいたかって？
理由は、他の人から見たら納得に値するようなことじゃないかもしれないわ。

・・・アイツ。
お仕置きするときも、仕事を命じられたときも。
決して逃げないのよ。
ちゃんと、イイコにしてる。
涙を流したり、辛そうに声をあげることあっても。
決して逃げないのよ。

考えてみて。
シオドスの体重はだいたい75キロくらい。
アタシの体重が、50キロ。
それに比べて、タクヤは15キロくらいしかないのよ？
タクヤを4倍しても、まだシオドスに届かないの。

身長だつてそう。
シオドスは180センチ。
アタシが、165センチ。

それに対して、タクヤは100センチも無いのよ？

自分の体重4倍。

身長が倍の大きさの人間が思いっきり叩くのよ？
何の手加減もせずに。

それなのにタクヤは逃げない。

決して抵抗しないの。

最初は面白がっていたけど・・・。

アタシもシオドスも気が付いちちゃったのよね。

『コイツ、ここで死ぬ気だ』って。

『ここに居座る気だ』って。

『ここ』って言うのは、何もこの家の事じゃ無いわ。

アタシとシオドスの二人の間で死ぬ気なんだってこと。

だから・・・。

・・・あたしたちは彼を捨てることにしたの。

不気味じゃない。

奴隷が願望を持つなんて。

奴隷が生き方を選ぶなんて。

アタシなりの予想を言うわね？

でも、多分・・・これがタクヤの考えていたことに間違い無いわ。

『包茎の癖に女性と付き合う』

社会で許されない行為だと知っていながらね。

そうすれば保有権がアタシに回ってくる。

保有権をいつか、アタシが行使すれば・・・。

タクヤは、もう一度アタシのそばにいられる。

それしか包茎男子が好きな女子と一緒にいる方法は無くないかしら？

分かっていたはずよ？

新しい男がいるって。

新しい男にも、アタシにも奴隷として扱われるって。

でも。

それでも……。

包茎のタクヤがアタシのそばにいるためには、それしか選択肢が無かったんじゃないかしら？

そのために、タクヤは高校の頃からずっとこうなるように仕組んだんじゃないかって。そう考えれば、あたしを抱かなかった理由も分かるわ。

(まあ、そもそも真正包茎だから抱けないけど……)

もしも、あの時アタシに迫っていたら……。

アタシは保有権を行使しないでしようね。

それはアタシも自分の性格だから分かるわ。

きっとタクヤに対する怒りを忘れない。

分かっているわ。

自分のことだもの。

でもね？

アタシとシオドスの幸せな家庭に、割って入ってきて……

それって、なんか嫌なのよ。

嫌な理由？

そうね。

いないと思っていたはずのゴキブリを見つけた感覚に近いかな。

捨てた男なのよ？

タクヤは。

感情を持たないなら、そばにおいてあげる。

そのくらい当然でしょ？

包茎なんだから。

奴隷なんだから。

男でさえ、ないのよ？

世界が許しても、あたしが許さない。

だって、そうでしょ？

この世界を楽しむのは、アタシのはずよ？

タクヤの計画通りに事が進むはず無いじゃない。

そういうのはプチプチ潰してあげるのが、世のためよ。

許さない。

許さない。

だから・・・

追い出すことにしたの。

結婚式のその日に。

だから・・・

ただの一度も、アタシとシオドスは夜の営みにアイツを近づけさせなかった。

普通の奴隷は、マ○コの舐め掃除ぐらいするものよ。

アイツ自信、性的なご奉仕が得意って自分で言ってたしね。

でも、させない。

させてあげない。

結婚式のとくに、子供がやるアレ。

新郎新婦が歩く道をに花びらを撒くやつ。

なんて言うのかしら？

ああ、そうそう！

フラワーガール。

アレをタクヤにやらせて、それでアイツの役割は終わり。

そのまま最果ての調教場に逆戻り。

アタシとシオドスが初夜を迎える頃に、タクヤは拷問官との再会を果たすの。

素敵でしょ？

包茎なくせに、女を愛した罰。

貞操帯を嵌められて、一生勃起も射精も出来ないの。

拷問されて生きていくの。

包茎のくせに、謀をした罰。

恋人を寝取られて、彼女の結婚式で花を巻いてバージンロードを清めるの。

そして、そのまま収容場に逆戻り。

それがあなたにはお似合いよ。

大好きだった彼女のマ○コ、見れなくて残念ね？

もう二度と保有権は行使しないわ。

さ、行くわよ。

シオドスとアタシが歩くバージンロードを清めなさい。

小賢しい包茎奴隷の坊や♥

(終わり)